

「えっ！マヤ？」



ケンはおもわず、さけんでしまいました。マヤが、にじいろかがやちょう虹色に輝く蝶になっていたのです。

びっくりしたケンは、「あのとき、エルムがわけてくれたはなみつ花の蜜のせいだ。それをすったから、マヤはちょう蝶になってしまったんだ。」と思いました。

「どうしよう・・・。どうすれば、マヤをもとすがたもと元の姿に戻せるんだろう・・・。」

ふあん不安になったケンは、エルムに

「エルム。ねがいだから、マヤをもとすがたもと元の姿にもどしてよ。」

ケンは、おおこえひっし たの大きな声で必死に頼みました。でも、エルムはなにいちょう何とも言わずに、蝶になったマヤと一緒いっしょ うすぐら もり なか きに薄暗い森の中へと消えていってしまいました。ケンはエルムをさがもり なかを探して、森の中へ

はい入りました。



「エルム。エルム。」

おおこえ大きな声でエルムをよんでみました。でももり なか ひび響くのは、ケんこえの声だけです。

「こわ怖いよ・・・エルム、マヤ、どこ・・・どこにいるの？」

な泣きそうになるのをがまん我慢して、ケンはもり なか さが ある森の中をエルムとマヤを探して歩いていきました。

すると、ひとすじのひかり み光が見えてきて、たくさんのはなごえ き話し声が聞こえてきました。

「だれ誰がいる！！」

ケンは、おもはし だ思わず走り出しました。

